

# photopos 90

---

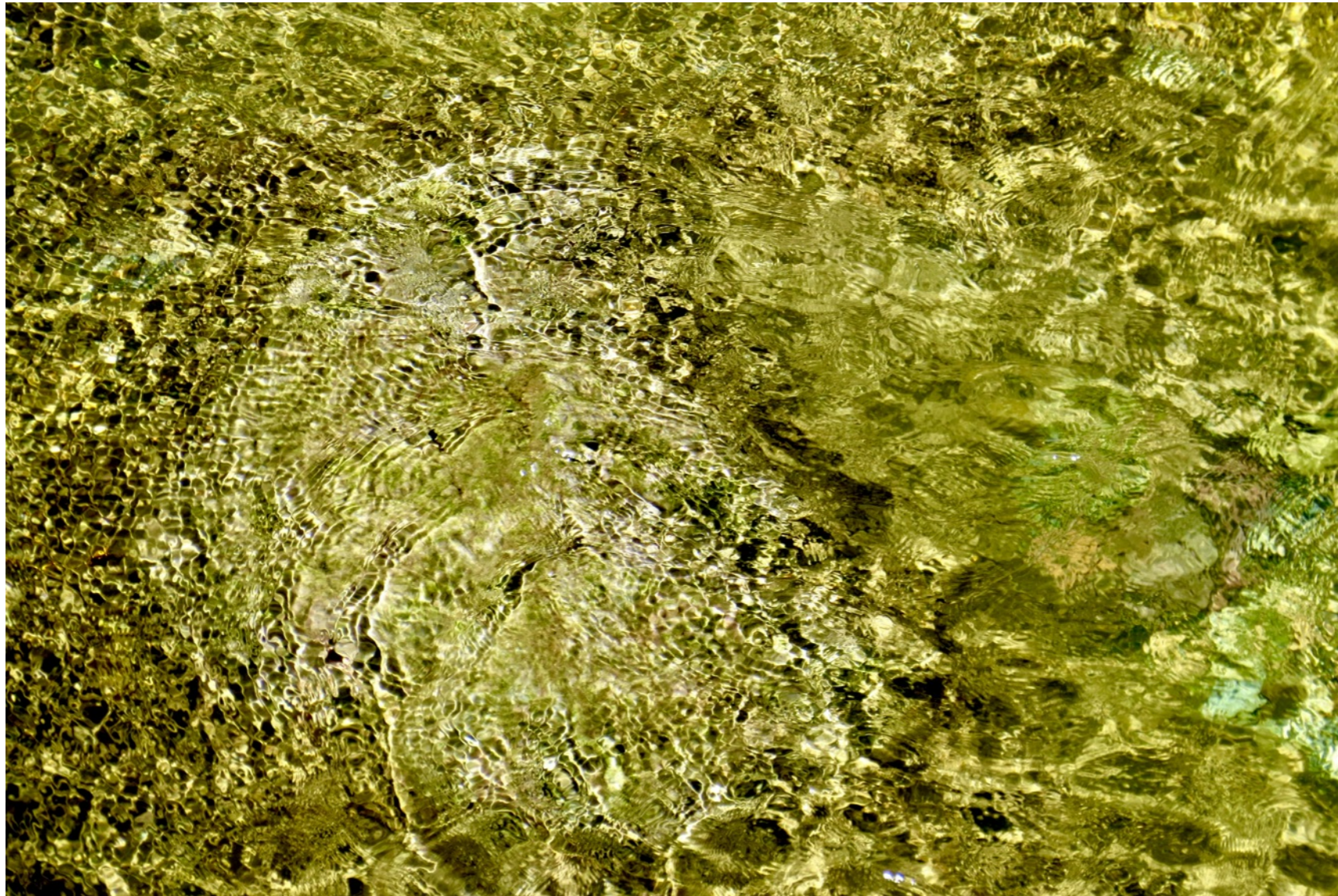
2020.10.11～2020.11.4

【神秘学ポエジー～風遊戯 第180集】

photo ヴァージョン

Photopos2226-2250

神秘学遊戯団



ことばは  
わたしのものではない  
この世が  
わたしのものではないように

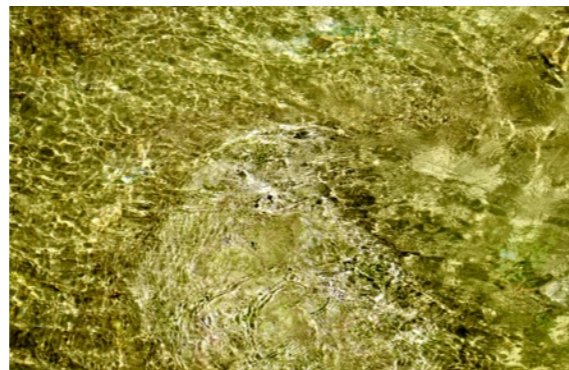
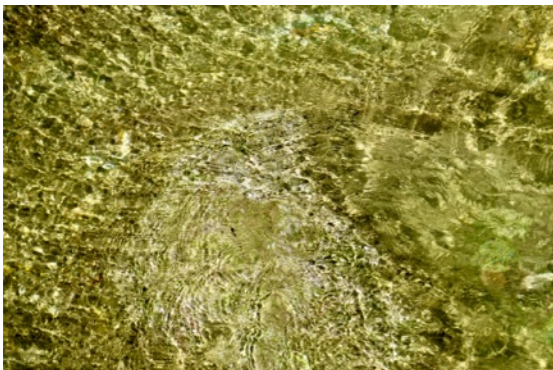
わたしは  
ことばを借りる  
わたしが  
この世に生まれてきたように

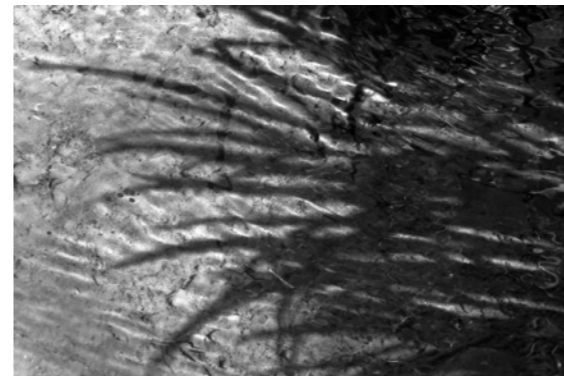
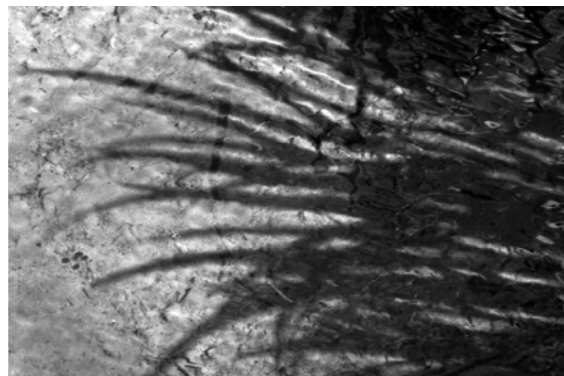
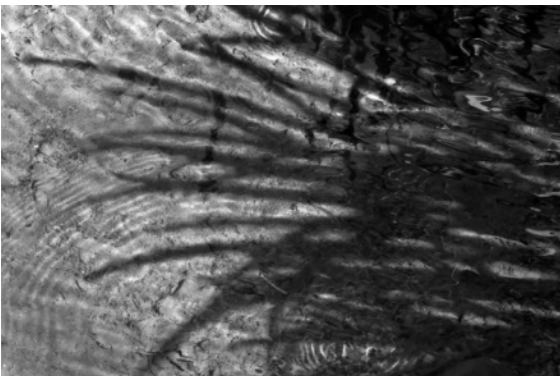
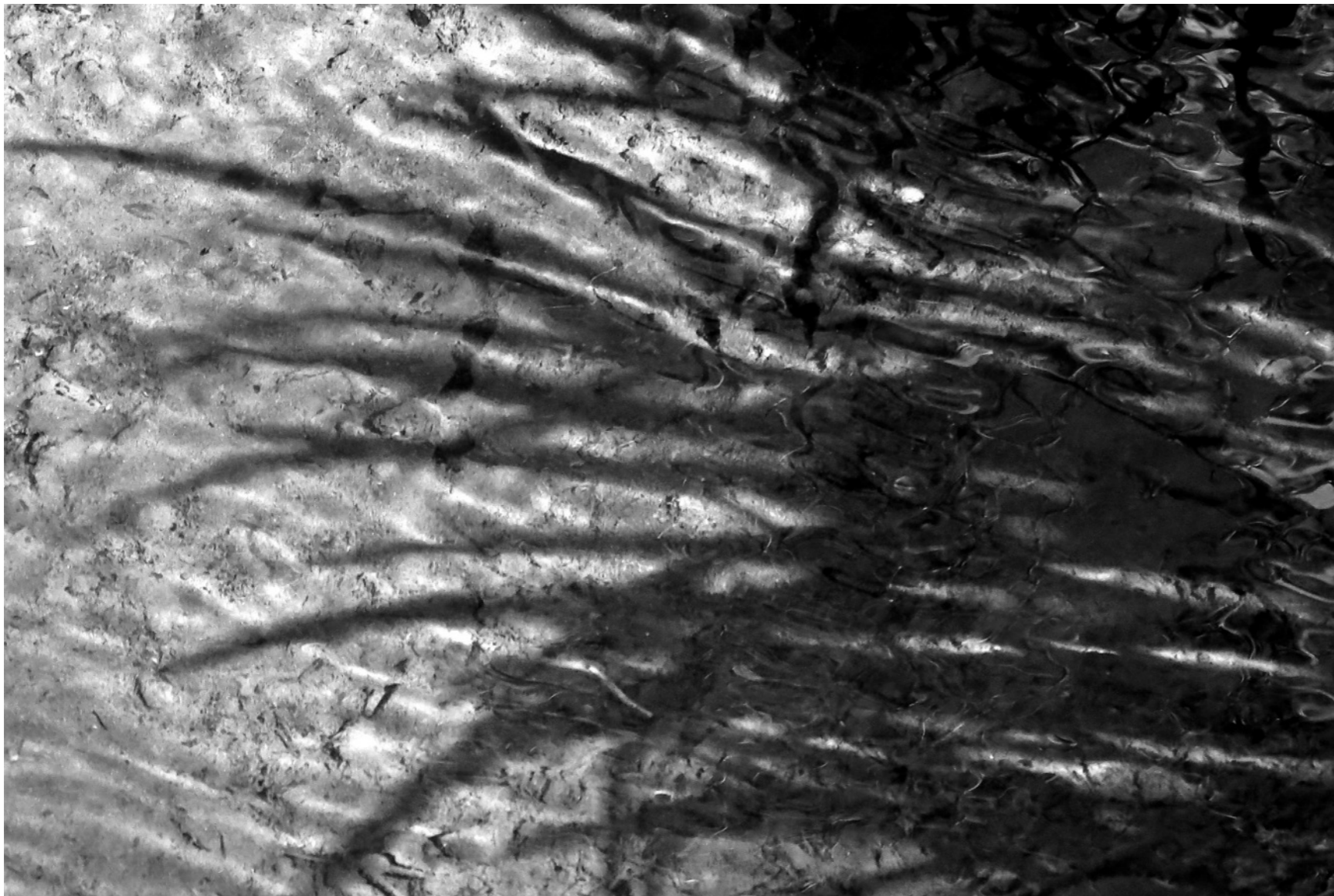
わたしは  
ことばとともに生きてゆく  
わたしが  
この世で生きてゆくように

ことばでは  
表せないことがある  
この世では  
できないことがあるように

それでもわたしは  
ことばから恵みをもらう  
この世が  
恵みともなるように

そして遣われたことばは  
またもとのところへ帰ってゆく  
わたしが  
生まれるまえのところへ帰ってゆくように





世界には色があり  
色をすべて混ぜたとき  
物質の色は黒となり  
光の色は白となる

光あれ！で生まれた世界は  
光にはならず  
闇の黒へと向かうのか  
生が死へと向かうように

それとも  
物質は光になろうとしている！  
その言葉を信じるならば  
黒もやがては白へと変容するのか

おそらく  
そうではないのだ  
黒も白も色ではない  
黒と白として表れているのは  
世界の根源からの射影なのだ  
数としての表れもまた  
世界の根源からの射影であるように

そしてひとは生のなかで  
色の世界とともにあることになる  
地上世界はまさに色だ  
けれど色は即空であるがゆえに  
超越は内在し内在は超越し不二となる

色とともにありながら  
色を超えて生きられますように



この世に  
はじめて  
ふれたとき  
わたしは  
泣いた

この世は  
わたしでは  
なかったから

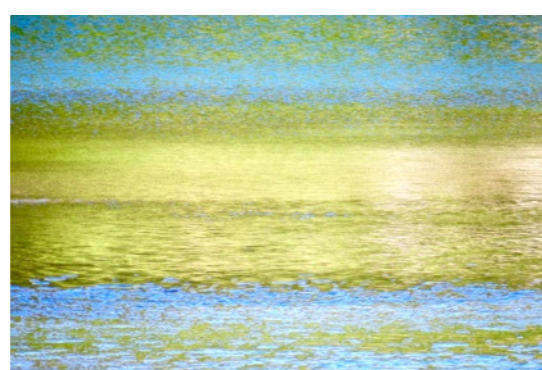
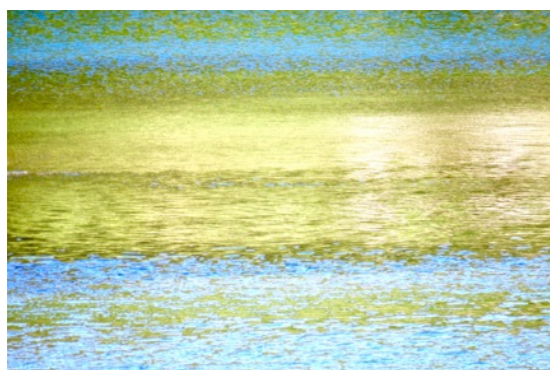
この世で  
生きていこうとしたとき  
わたしは  
また泣いた

あなたは  
わたしでは  
なかったから

けれど  
あなたは  
わたしではなかったから  
そこに愛が生まれた

あなたに  
はじめて  
ふれて  
わたしは  
また泣いた

悲しいからではない  
この世に生まれた  
よろこびを知ったから



※高知県日高村・めだか池にて



それを  
意味づけるのは  
やさしいことだ

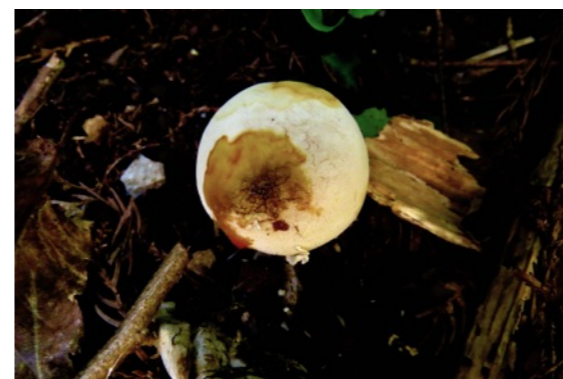
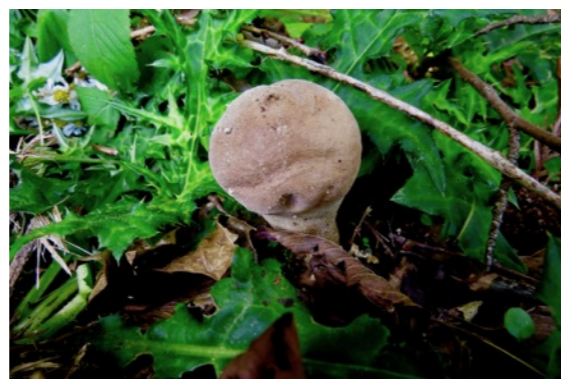
そしてそれに  
べつの意味を与える者に  
それもあるだろう  
そう言うってみることさえできるが

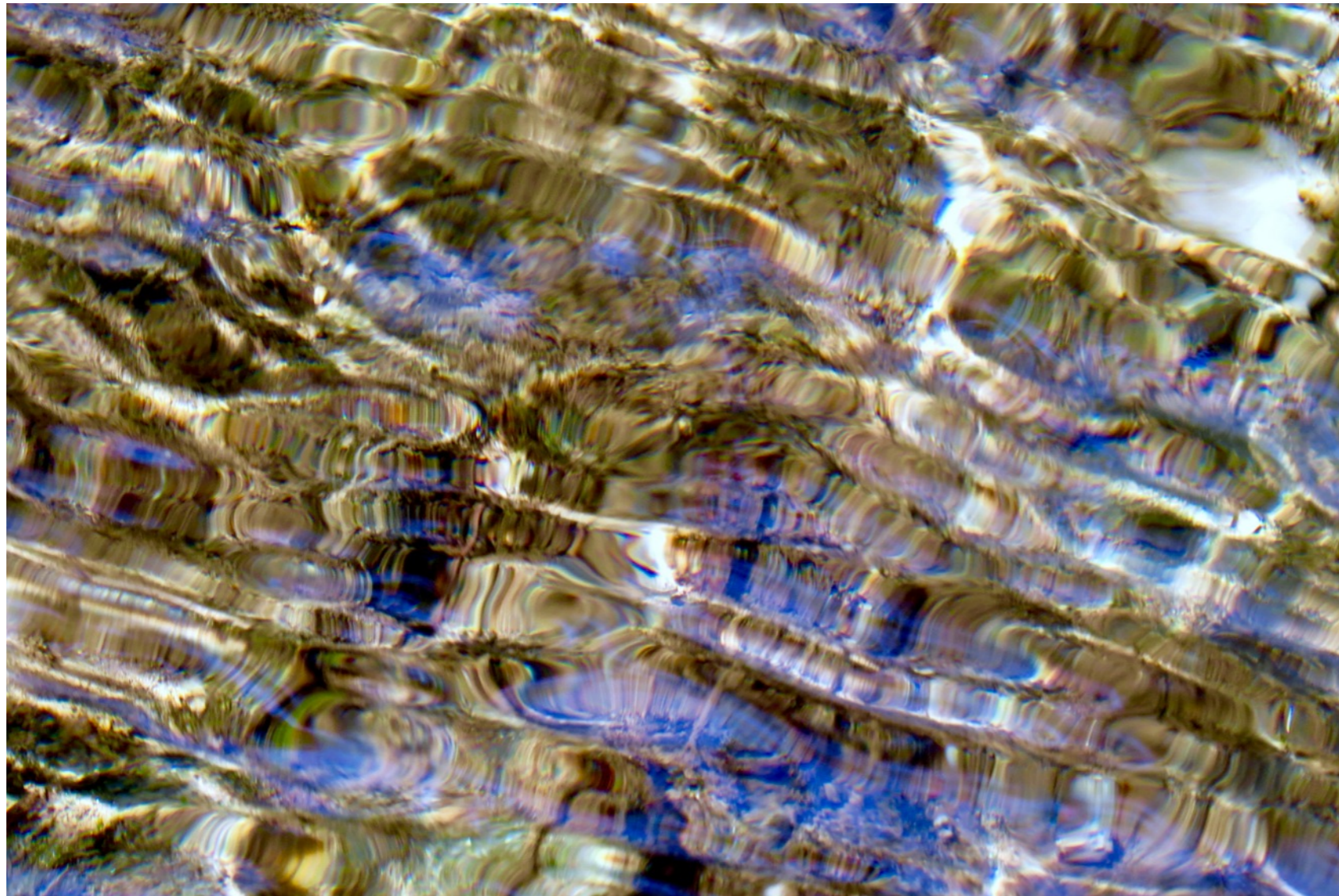
だいじなことは  
その意味が  
じぶんにとって  
いったいなんであるか  
それを見つけることだ

遊びであっていい  
誤解であっていい  
故事付けであっていい

その意味が  
あらたななにかを  
指し示していさえすればいいのだ

それこそが  
意味を超え外へと向かう  
まだ知られない  
種ともなるのだから



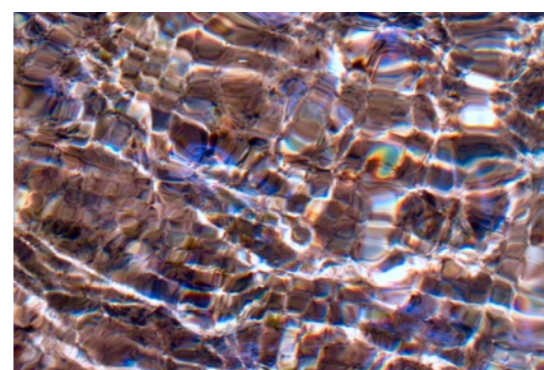
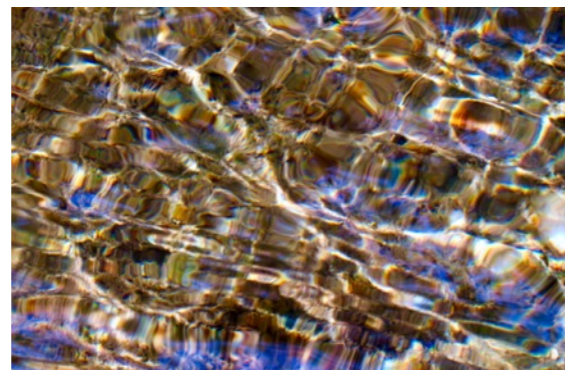
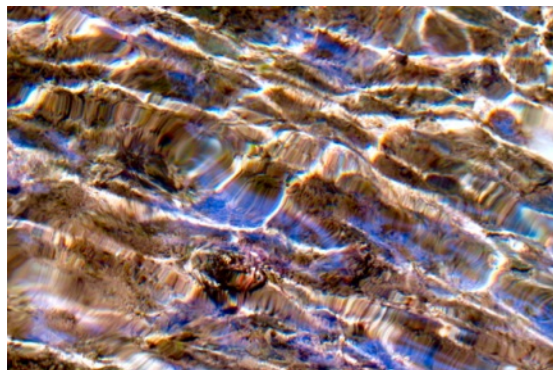


神は  
外から来るのか  
内から来るのか  
そのあわいで  
聖なる光は  
ひとつの比喩のように  
ゆらいでいる

死は  
外から来るのか  
内から来るのか  
そのあわいで  
聖なる生は  
ひとつの祈りのように  
捧げられている

詩は  
外から来るのか  
内から来るのか  
そのあわいで  
聖なる声は  
ひとつの弦のように  
響いている

時は  
外から来るのか  
内から来るのか  
そのあわいで  
聖なる永遠は  
ひとつのアラベスクのように  
広がっている





ひとは皆  
魔女で魔法使い  
じぶんに  
魔法をかけているのです

どんなふうに  
生まれてくるか  
それも  
じぶんにかけた  
不思議な不思議な魔法です

生まれてくると  
そんな魔法のことなど  
すっかり忘れてしまって

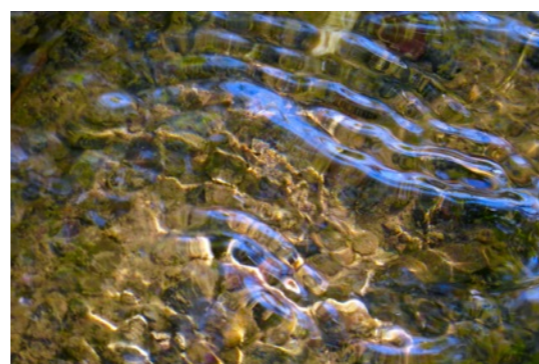
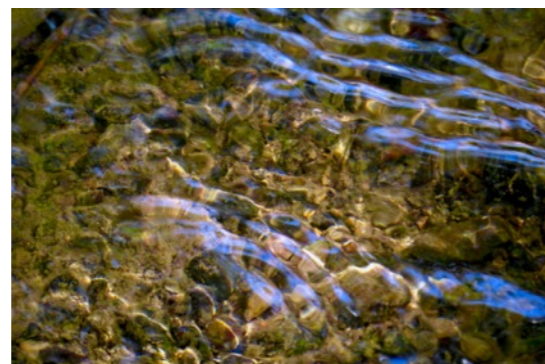
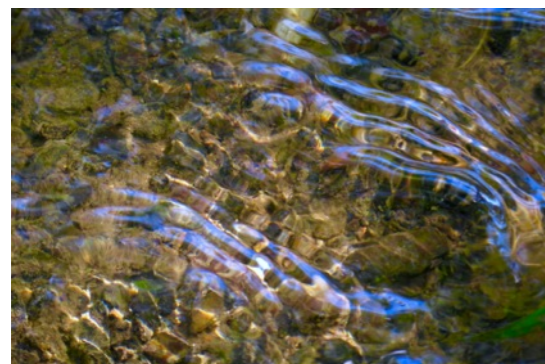
じぶんに魔法をかけていることも  
その魔法を解く方法も  
知らないまま生きてゆきます

この世では  
じぶんにかけた魔法は  
魔法以外の方法で  
解かなくてはならないのが  
決まりだからです

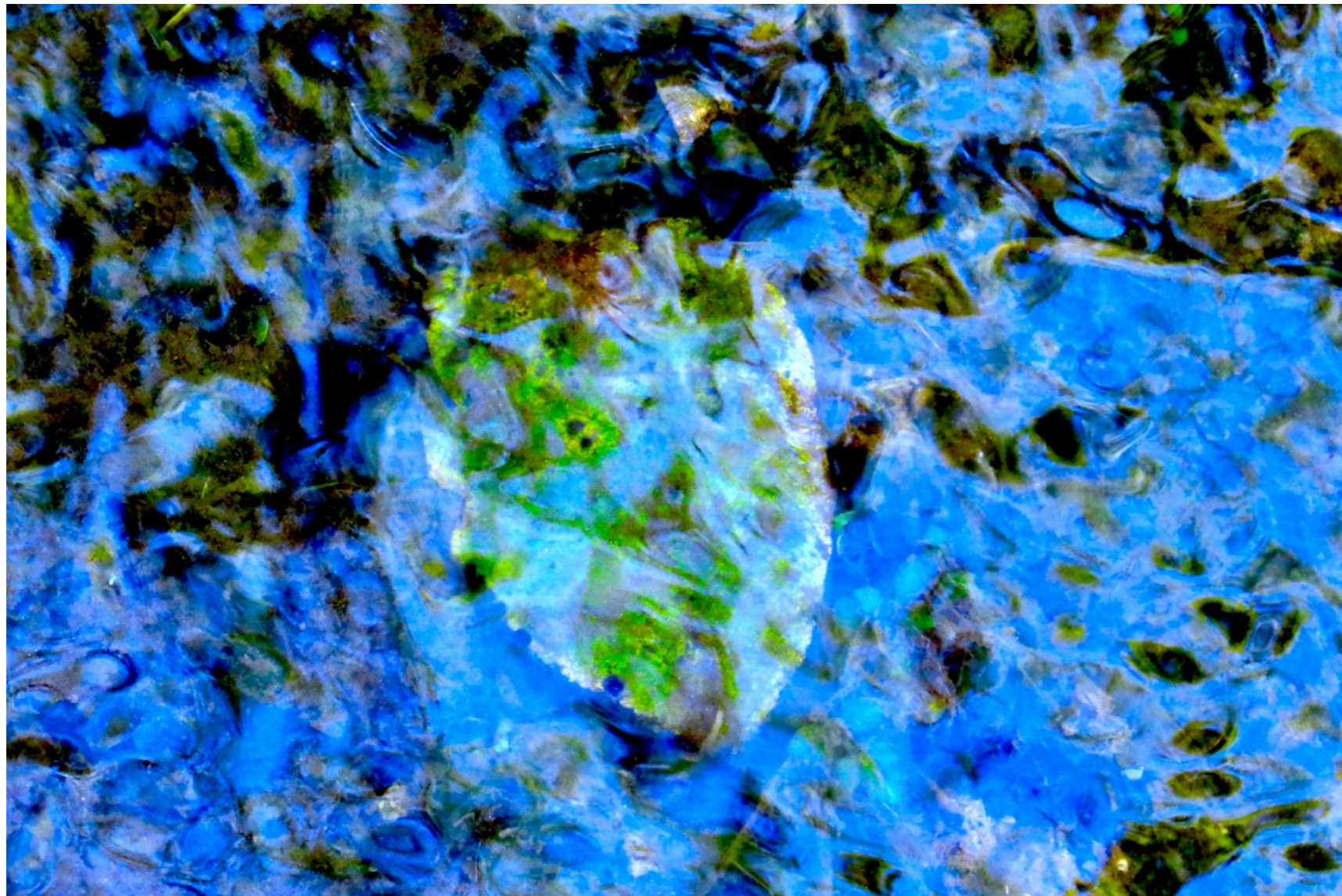
だからなのです  
なんのために忘れていいのかさえ  
ずっとずっとあとになるまで  
わからないままです

そしてやっとのことで  
魔法を解いて  
思い出すことのできたとき  
魔女も魔法使いも  
不思議な不思議な涙を流します

決して悲しいからではないのです  
忘れていてほんとうによかったと  
魔法のよううれし涙を流しつづけるのです



※高知県日高村・めだか池にて



欲望の主（ぬし）は  
かならずしも  
わたしではない

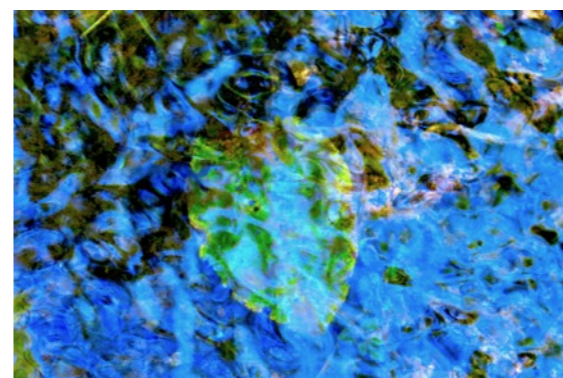
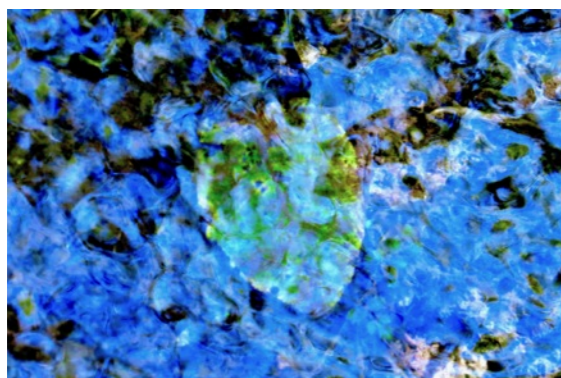
欲望は  
得体の知れない魔物が  
操っているからだ

魔物は  
正体を知られないように  
わたしという仮面をつけて  
じぶんで踊っていると思いきませる

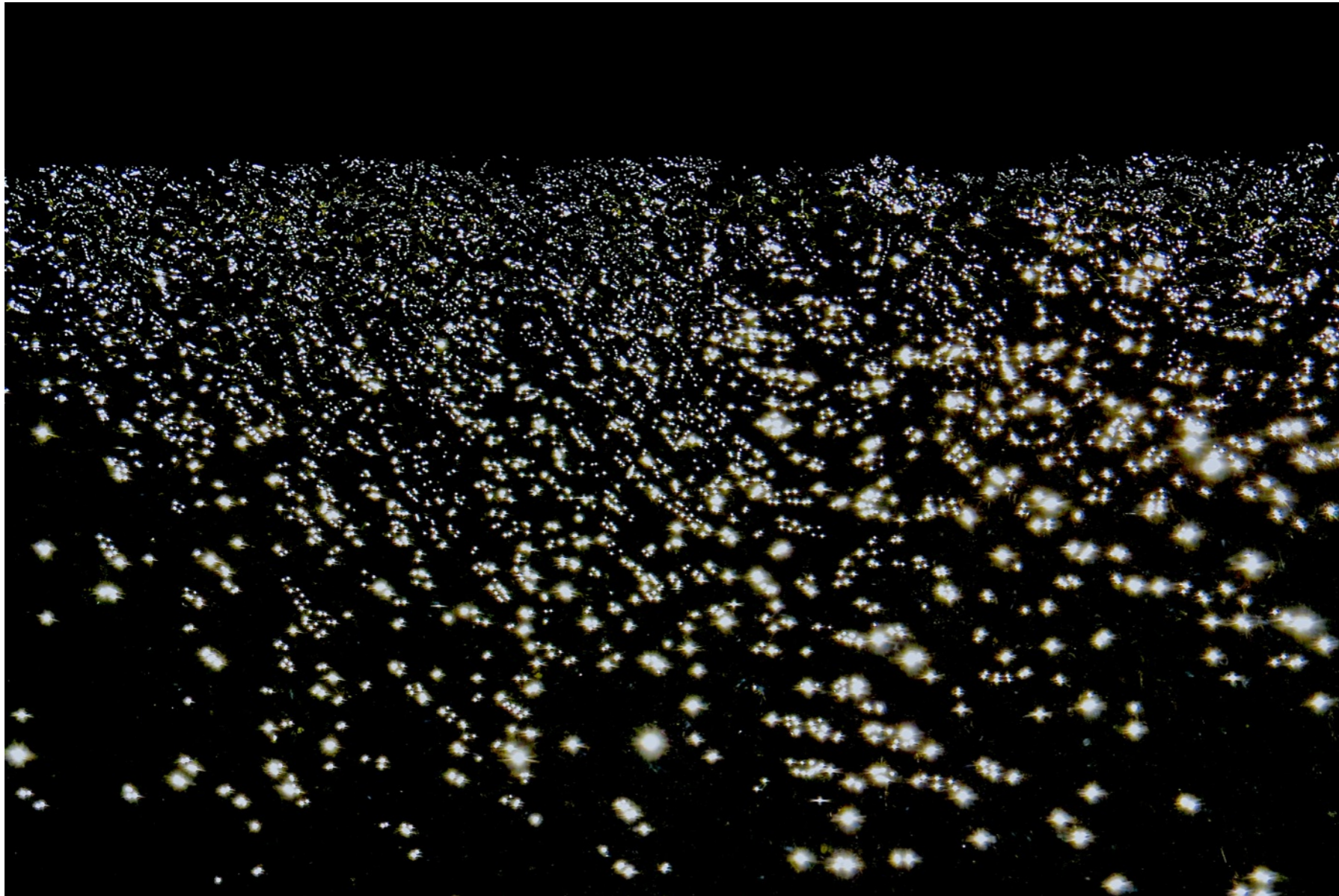
そして  
いつのまにか  
魔物はわたしになって  
仮面は外せなくなってしまふ

けれどほんとうは  
魔物は魔物ではないのだ  
耐えきれぬほどの悲しみのため  
わたしのつくりあげた  
わたしのもうひとつの姿

わたしと魔物は  
その悲しみを欲望にかえて  
手を取りあって踊りつづけているだけな  
のだ  
悲しみの癒えるだろうそのときまで







生きていることではか  
生まれたい問がある

どんなに否定的な問いでさえ  
生きていることこそ  
問うことができる

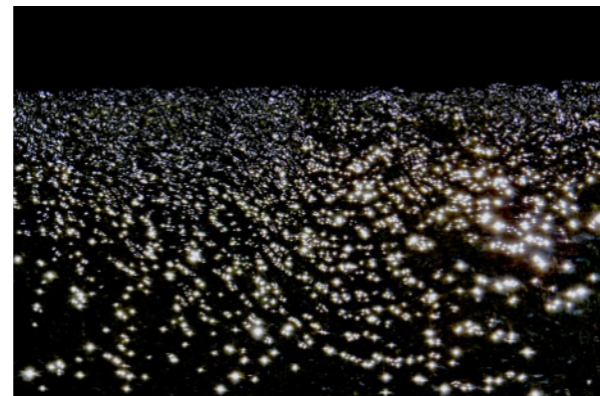
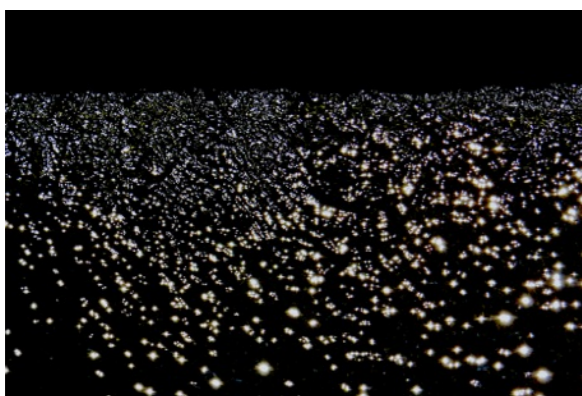
生まれてこないほうがよかったのか  
という問いさえも  
生きているからこそ生まれる

否定された現在も  
現在があるからこそ存在する

否定された世界も  
世界があるからこそ存在する

そして死さえも  
生まれているからこそ存在する

現在も  
世界も  
そして死も  
その先へゆくためには  
生という道を歩んではじめて  
新たな姿を得ることができる  
闇のなかにみずから光を放つように





その色を  
なんと  
名づけよう

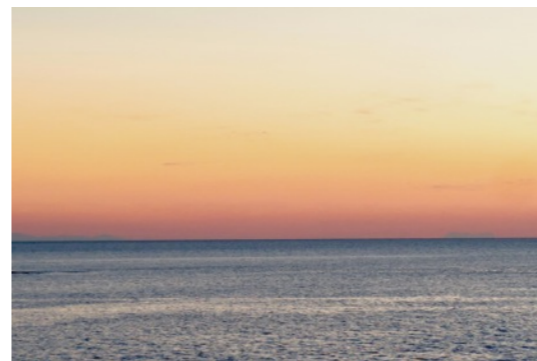
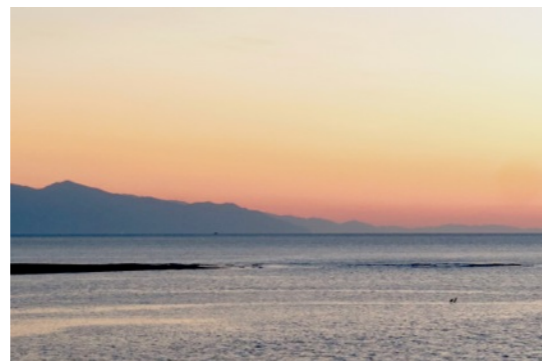
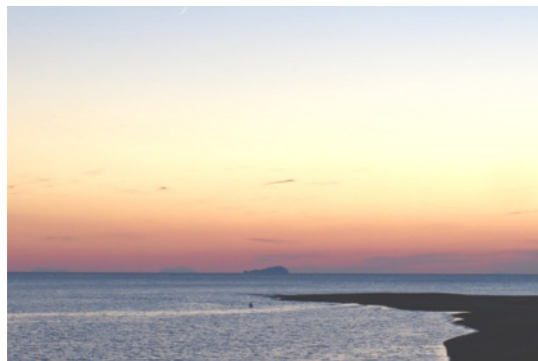
色は  
どこから  
うまれたのか  
そして  
どこへとゆくのか

名づけられた  
色の名とともに  
わたしは光を生きる

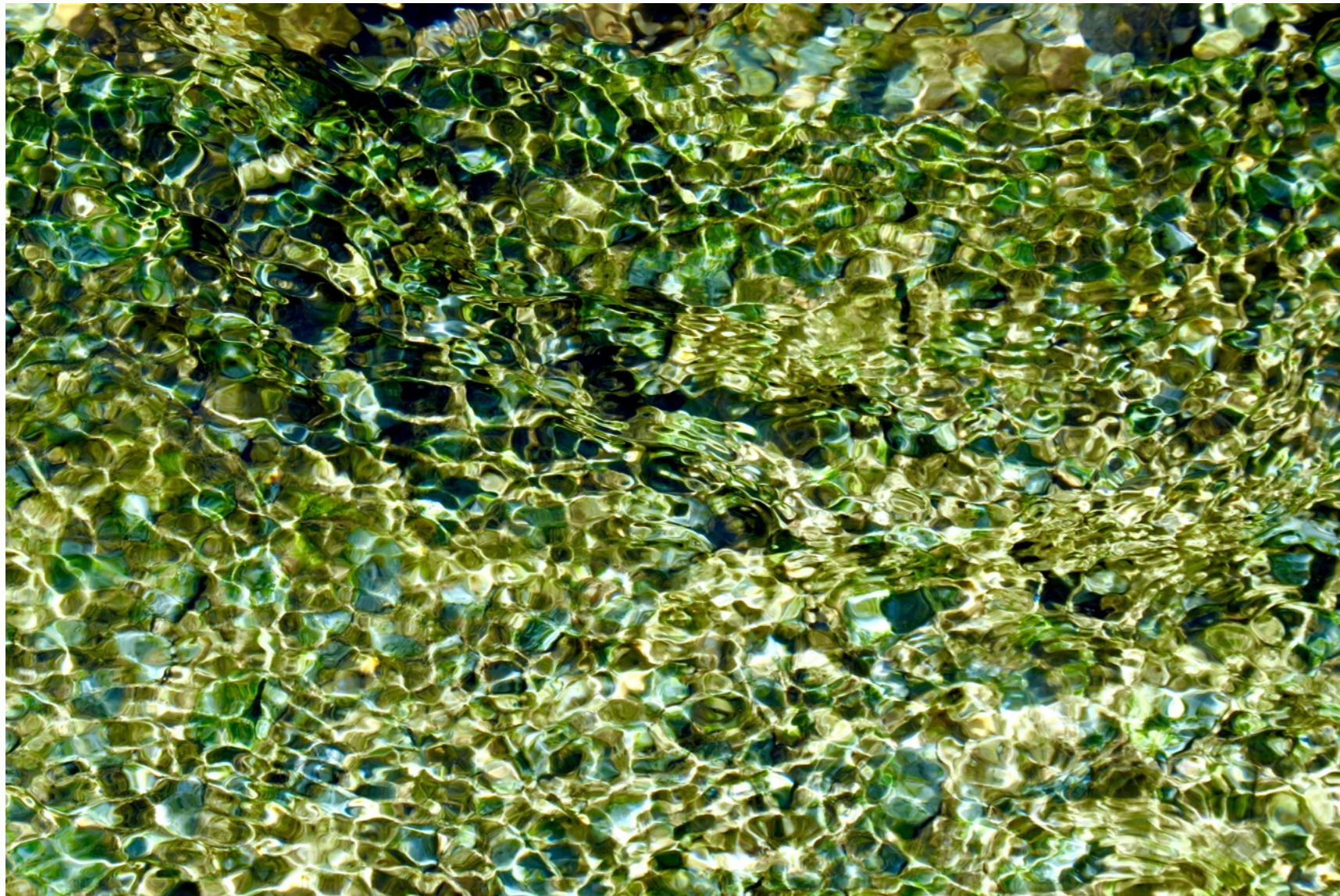
その心を  
なんと  
名づけよう

心は  
どこから  
生まれたのか  
そして  
どこへとゆくのか

名づけられた  
心の名とともに  
わたしは心を生きる



※愛媛県松山市・重信川河口にて



うつし  
うつされ  
鏡のごとく

わたしと  
わたしの  
合わせ鏡

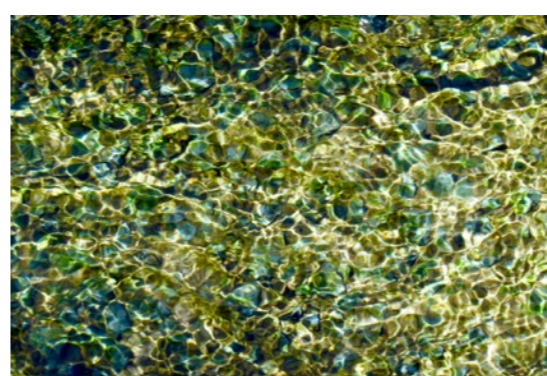
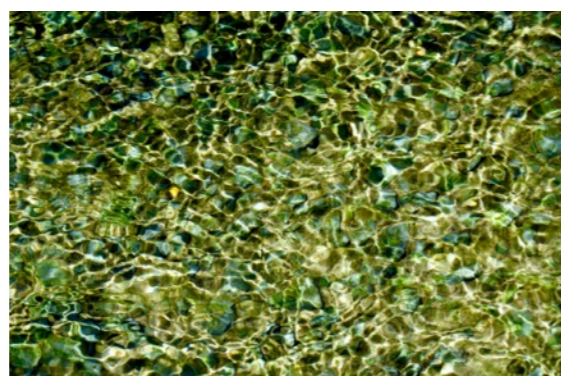
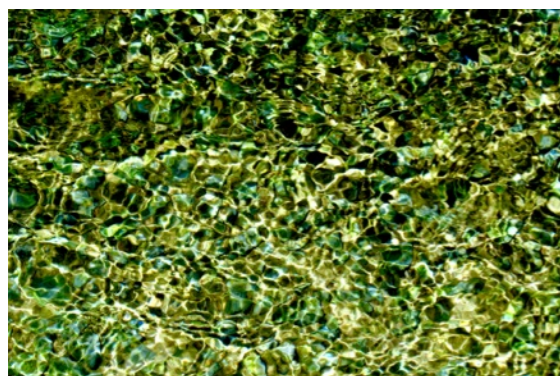
わたしは  
わたしを  
うつし

わたしは  
わたしに  
うつされ

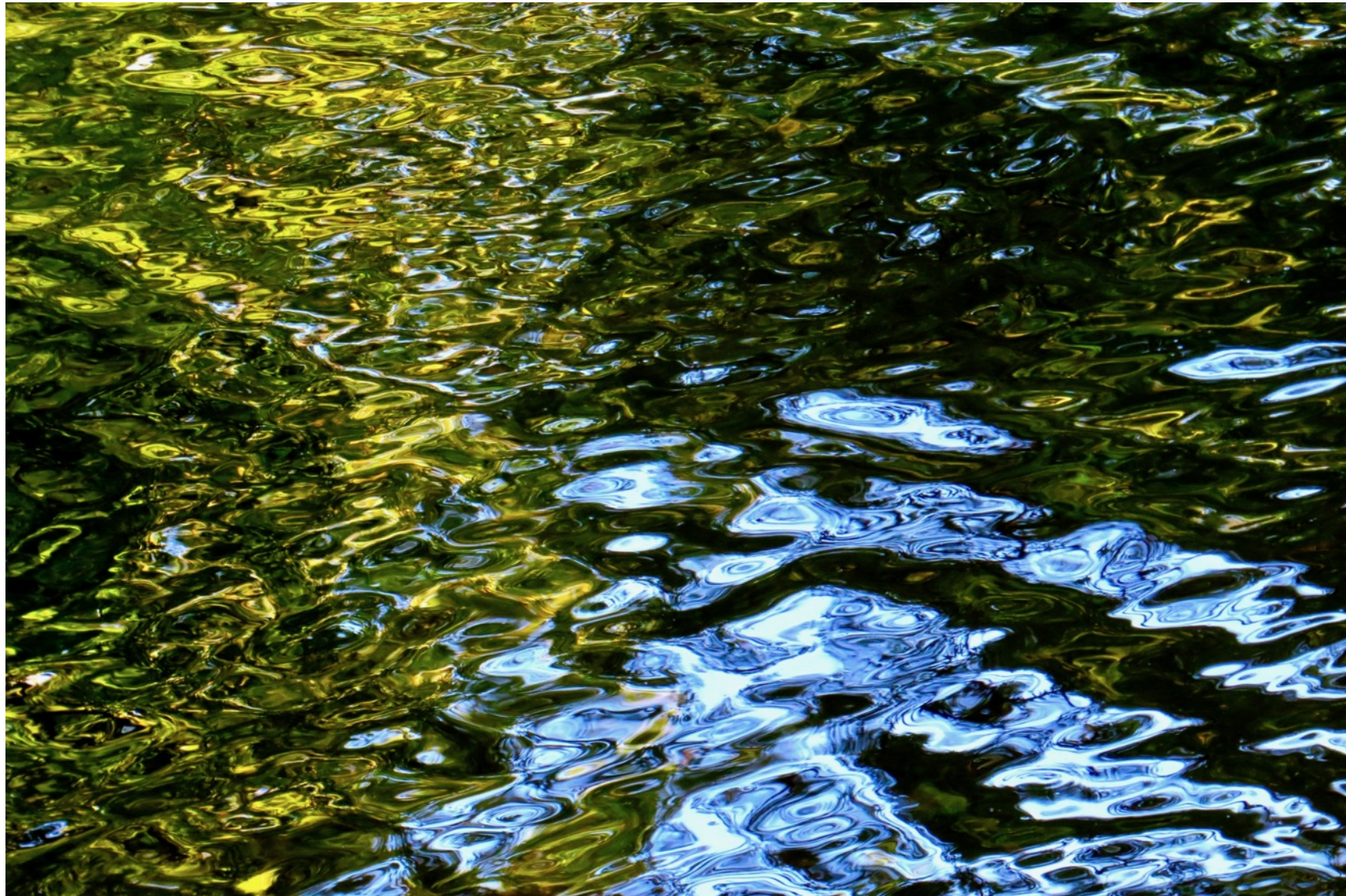
わたしは  
わたしたち  
になり

わたしたちは  
わたし  
になり

わたしという  
迷宮からの  
出口はどこに



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

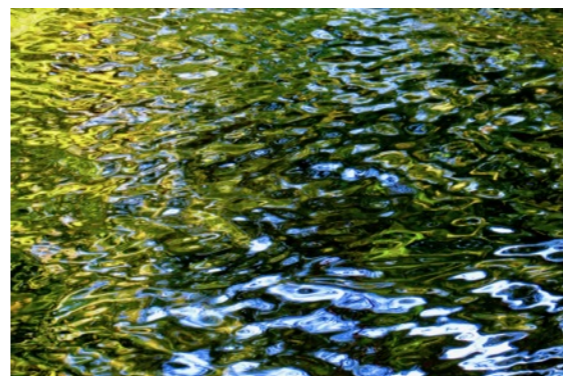
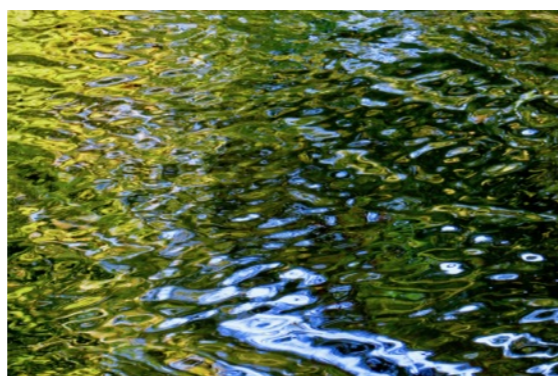
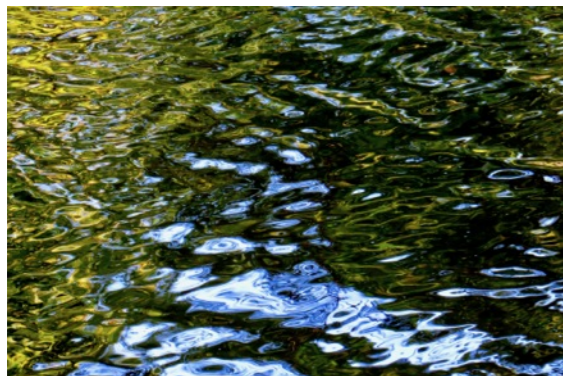


毒といふ  
美の花を  
愛でるは  
何ゆえぞ

薬といふ  
楽草もて  
癒す毒の  
花ゆえに

悪といふ  
悲の花を  
愛でるは  
何ゆえぞ

生といふ  
苦の果の  
迷ひ道の  
花ゆえに





風は見えているか

見えているのは  
風ではない  
ゆれる樹々  
さざめく水面だ

そう言う者もあるだろうが  
風が見えなければ  
風の声は聞こえないのだ

聞こえているのは  
風の声ではない  
空気の渦が  
声のように聞こえるだけだ

そう言う者もあるだろうが  
風の声が聞こえなければ  
風の心はわからないのだ

それはただ  
心の厳しき荒さを  
心の塵を払う動きを  
風にたとえているだけだ

そう言う者もあるだろうが  
風はいのちを孕む源として  
魂に新たな智慧を運んでくる  
神秘の光でもあるのだ



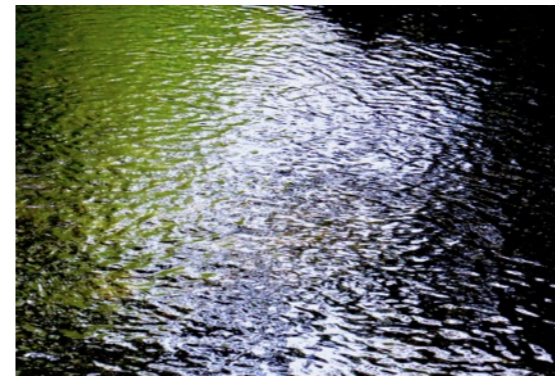
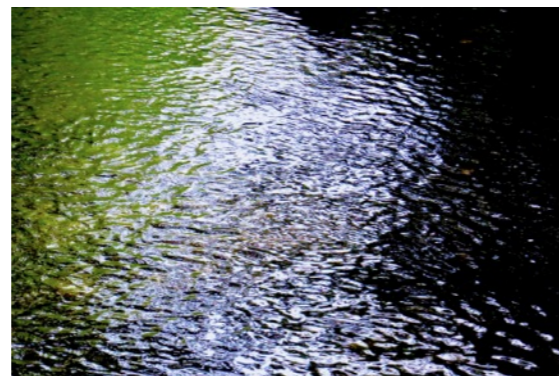
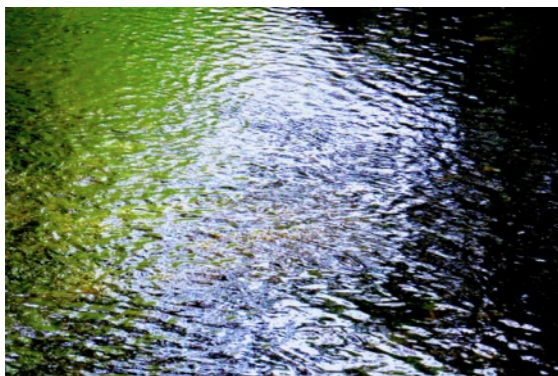


偶然という  
かけがえのない水を  
愛おしむ如く飲む者は  
さいわいである

水は  
魂の閾を超えて  
深くしみわたり  
瑞となるだろう

私という  
かけがえのない偶然を  
懸命に生きる者は  
さいわいである

偶然は  
時の深みのなかで  
育まれながら成熟し  
未だ見ぬ私を生むだろう





それを  
なんと  
名づけるか

(名づけられるまで)  
(渾沌のままに)

その名によって  
それは  
顔をもち

(顔をもつまで)  
(何者でもないままに)

その顔によって  
それは  
言葉を語りはじめ

(言葉を語るまで)  
(物語のないままに)

その言葉によって  
それは  
心をあらわし

(心をあらわすまで)  
(内なるもののないままに)

その心によって  
それは  
光を生み  
そして闇を照らしはじめ



☆photopos-2240

2020. 10. 25



どこから  
来たのか  
知らない

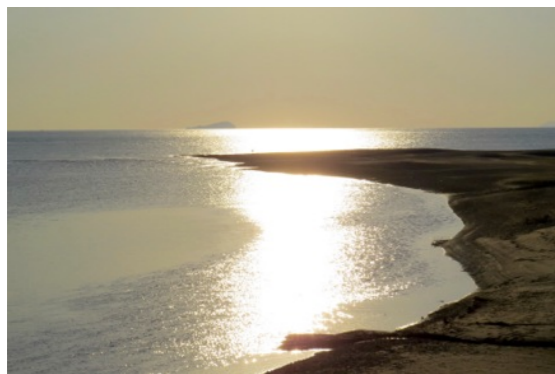
どこへと  
行くのか  
知らない

指は指す  
その先の  
見えぬ地

心は指す  
その先の  
未知の我

光よあれ  
闇の地を  
照らして

時を超え  
謎の彼方  
見つめて



※愛媛県松山市・重信川河口にて





天から  
人は落ちてきた  
のだろうか  
墮天使の如く

地をゆく  
人のために  
光は照らす

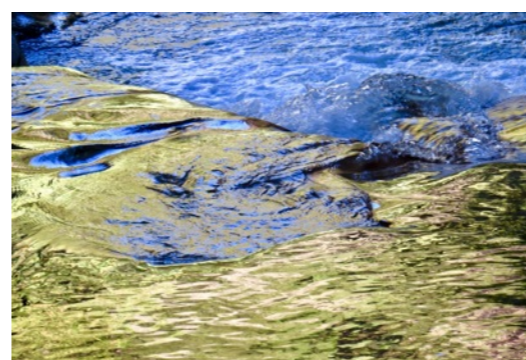
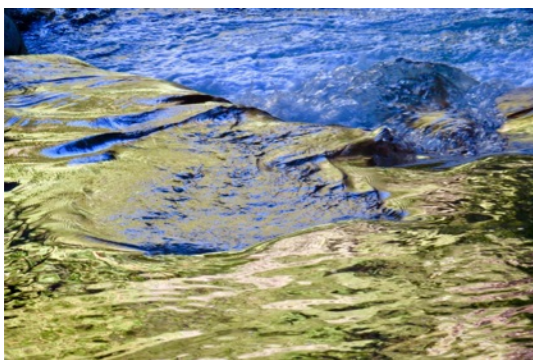
けれども光は  
受苦のうちに  
色を放ち  
心をふるわせ

水は  
無常のうちに  
地を流れ  
からだをめぐり

風は  
無我の如く  
空をめぐり  
叫びに呼応する

やがて  
人は祈る  
だろうか

地を  
天へと  
むすぶ歌を  
捧げるために



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



たとえ  
一歩も  
動けないとしても  
自由は決してなくさない

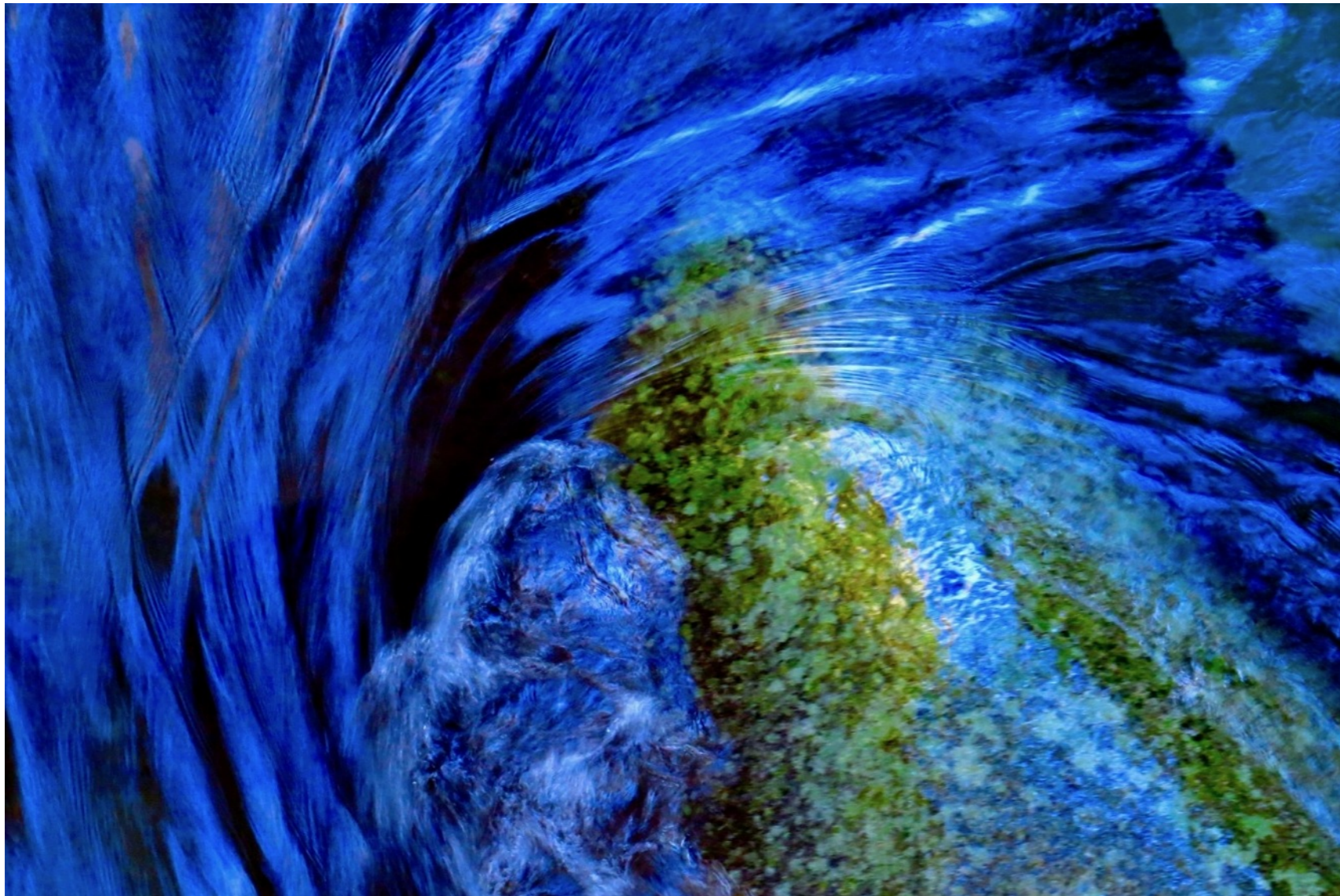
自由は  
与えられるものではないからだ  
自由のために  
己との面壁を事とする

たとえ  
一言も  
語れないとしても  
自由は決してなくなるらない

自由は  
語り得るものではないからだ  
自由のために  
沈黙をこそ奏でる己となる



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



わたしは  
どこから  
生まれたか

問われないとき  
わたしは  
わたしのだが  
問われたとき  
はじめて  
わたしの深みにある  
わたしがあることに気づく

それでも  
わたしは  
このわたしとして  
たしかにたしかに  
(けれどときおり不安に満ちて)  
生きているのだが

ことばは  
どこから  
生まれたか

問われないとき  
ことばは  
ことばのだが  
問われたとき  
はじめて  
ことばの深みにある  
ことばがあることに気づく

それでも  
ことばは  
このことばとして  
たしかにたしかに  
(けれどときおり不安に満ちて)  
語られているのだが

せかいは  
どこから  
生まれたか

問われないとき  
せかいは  
せかいのだが  
問われたとき  
はじめて  
せかいの深みにある  
せかいがあることに気づく

それでも  
せかいは  
このせかいとして  
たしかにたしかに  
(けれどときおり不安に満ちて)  
表れているのだが



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



わたしの碧（あお）は  
わたしの碧

碧という言葉は  
すべてのひとの碧なのに

わたしの碧は  
わたしだけの碧

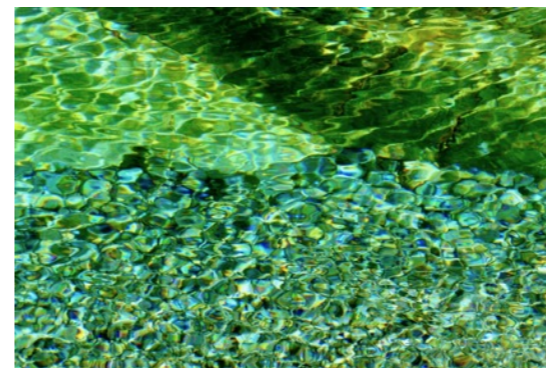
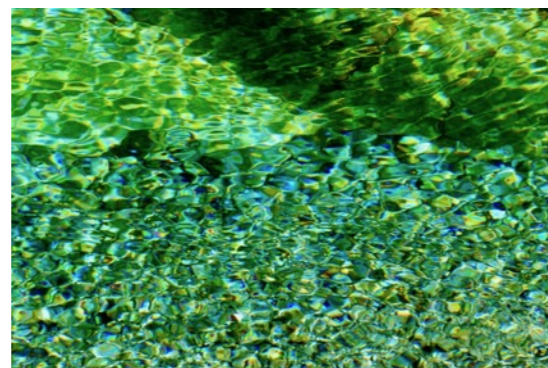
けれど  
その碧を  
たいせつなあなたに  
見せたいのだ  
あなたの碧として

わたしの心は  
わたしの心

心という言葉は  
すべてのひとの心なのに

わたしの心は  
わたしだけの心

けれど  
その心を  
たいせつなあなたに  
届けたいのだ  
あなたの心に



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



記憶のなかを  
ふいに歌が流れる

あの歌は  
あの声は

遠く近く  
歌が流れる

記憶のなかを  
ふいに光が流れる

あの色は  
あの影は

遠く近く  
光が流れる

記憶のなかを  
ふいに言葉が流れる

あの文字は  
あの響きは

遠く近く  
言葉が流れる

記憶のなかを  
ふいに心が流れる

あの喜びは  
あの悲しみは

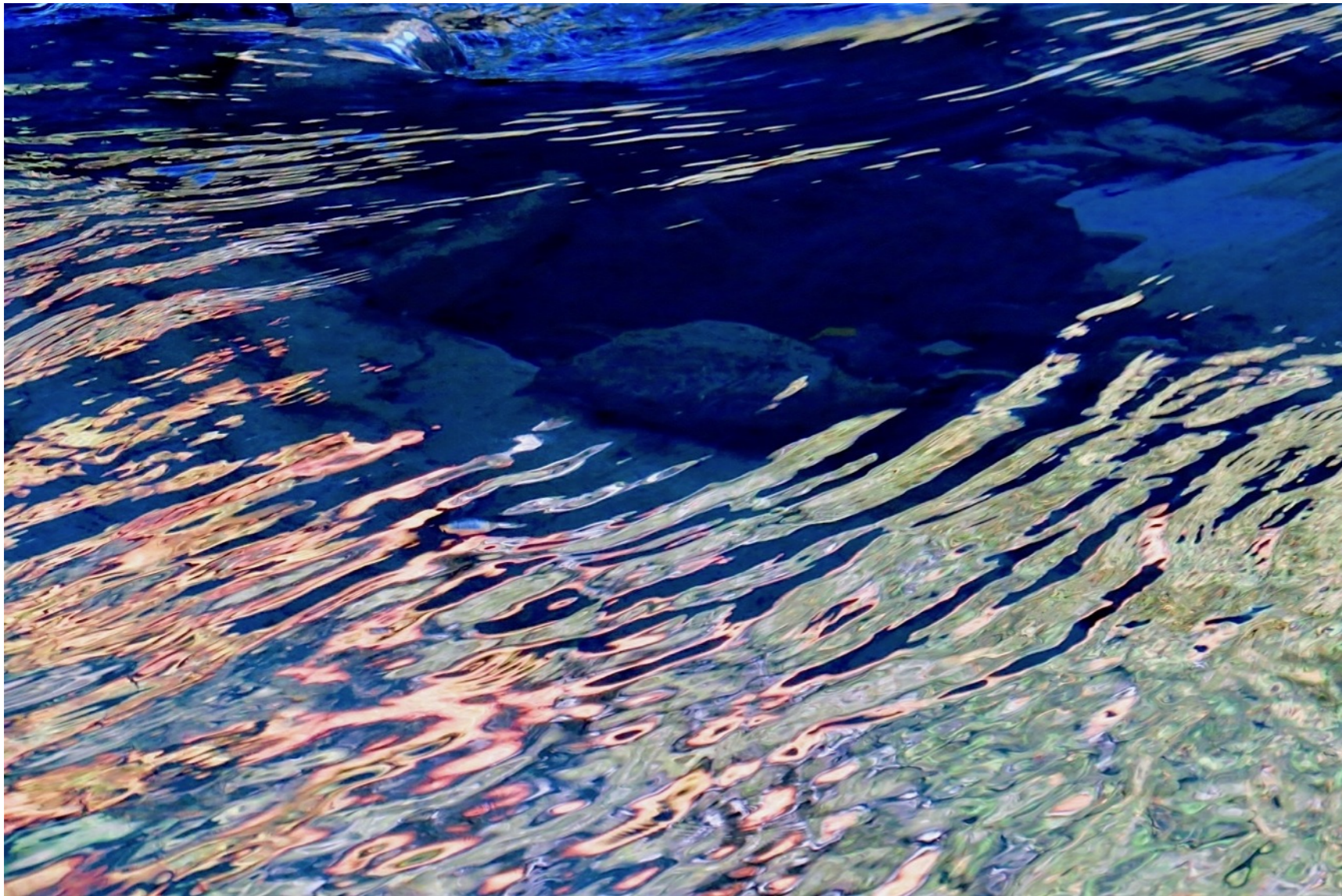
遠く近く  
心が流れる

記憶のなかを  
ふいに時が流れる

あの刹那は  
あの永遠は

遠く近く  
時が流れる

※愛媛県久万高原町・面河溪にて



それは  
見えない  
見てはならない  
そう思っていた

ヴェールは  
隠すためにあり  
許された者だけにしか  
秘密を見ることはできないと

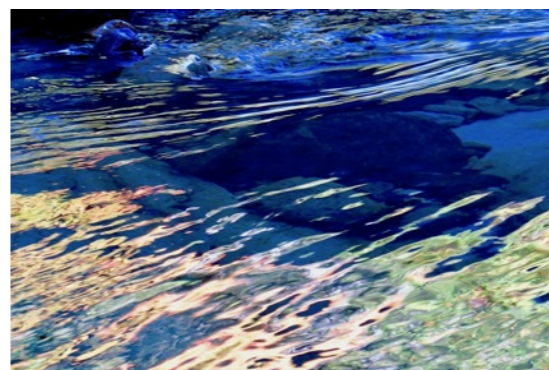
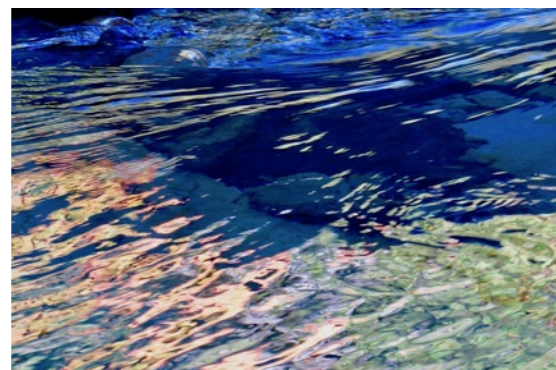
観るために  
力を蓄えるのだ  
古い力ではない  
新たな力を

ヴェールは  
その古き力の者のためのものだ  
古い力は  
思い出せたとしても  
すでに過去の力にすぎない

古い力は  
失われねばならない  
失うことを恐れてはならない  
失うことではじめて  
それが新たな力の種となるのだから

ヴェールはそのとき  
はじめて覆いを外される  
そのとき見えるものに  
驚いてはならない

そこにあるのは  
他者から見た  
己を映しだす鏡なのだ  
世界はそこで  
無限遠点と交差する



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



生きる  
ただ  
生そのものと  
ともにある  
あろうとする

けれど  
ただ生きることは  
できない  
ひとはともに  
生きねばならないからだ

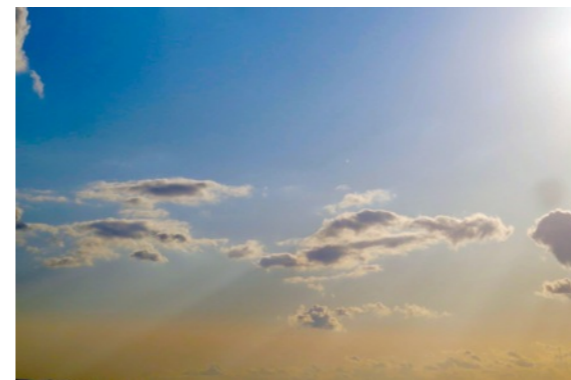
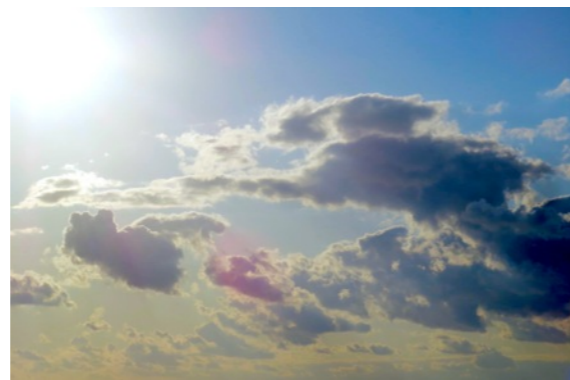
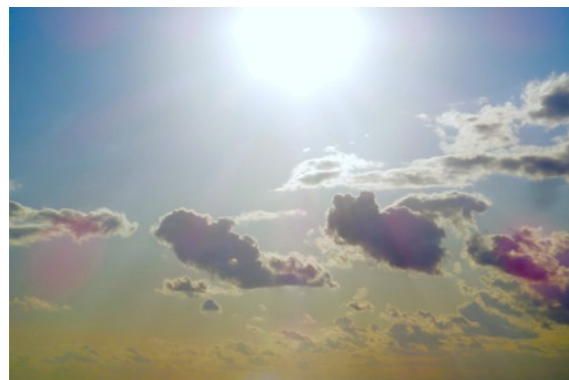
ともに生きるためには  
必要とされるかたちがある  
そしてそのかたちは  
与えられたかたちとして  
いつのまにか  
ずっとそこにいたかのような  
顔をしてそこにある

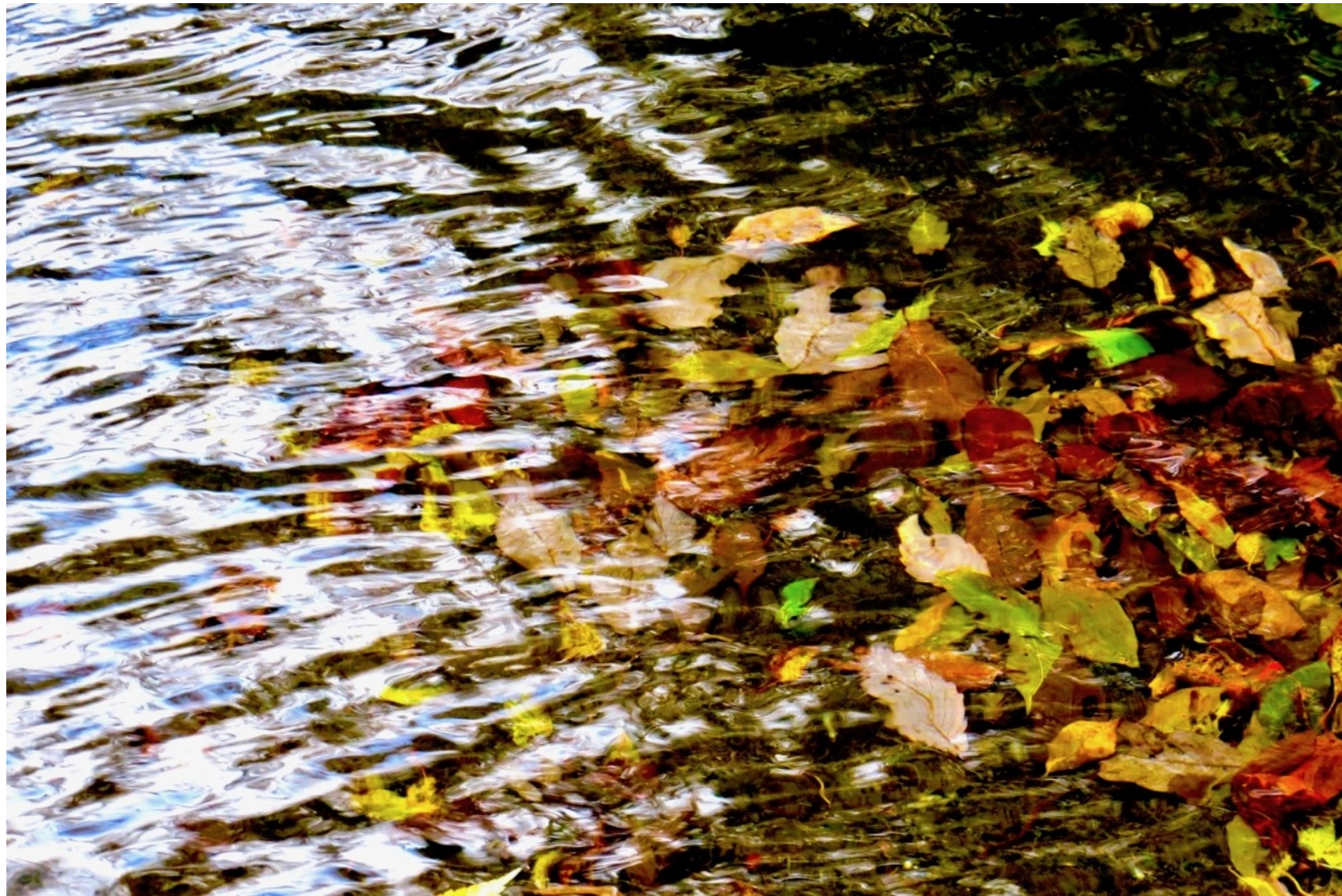
かたちは  
どこからくるのか  
いつのまにか  
決められている  
生きるためのかたち

かたちのなかで  
生きることは  
生そのものではないのに  
ともに生きるためのかたちをして  
生を送らねばならない

ときには  
生きることが否定され  
死さえも強いられるような  
ともに生きるかたち

ただ生きることは  
できないものか  
光と風のなかを  
自由に遊ぶように





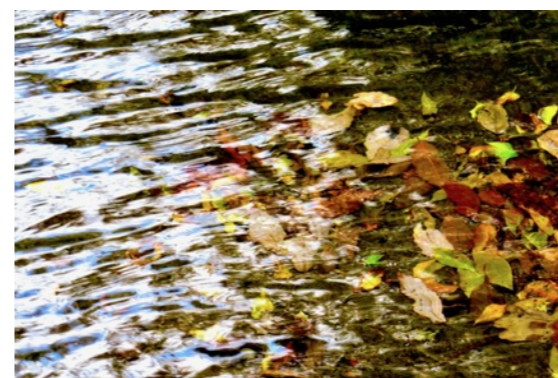
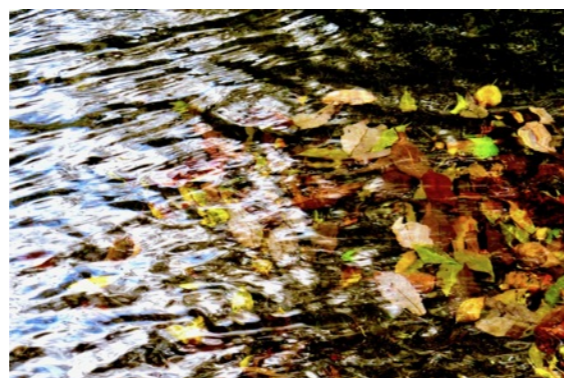
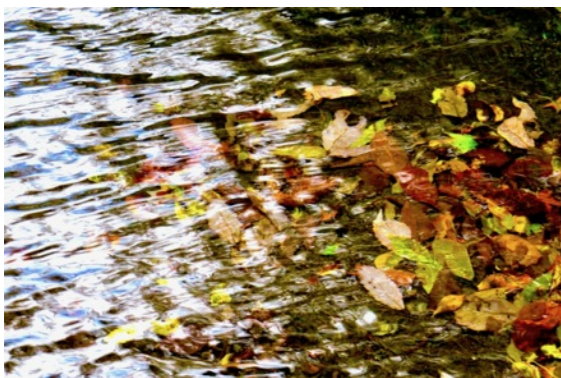
言の葉の  
色づく  
季節来たりて

言の葉は  
静かに  
歌ふ

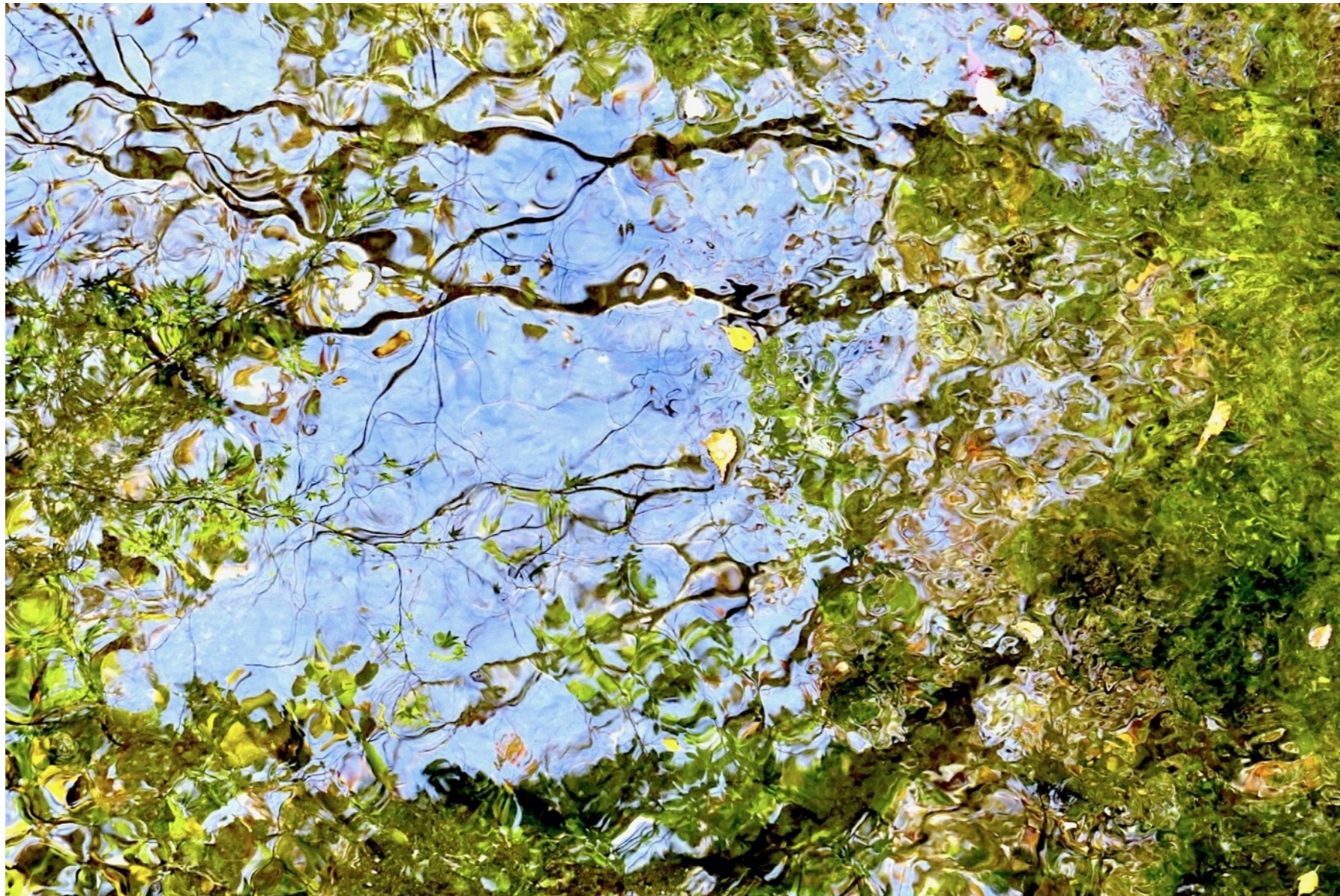
言の葉を  
心に  
浮かべ

言の葉に  
寄せる  
思ひよ

言の葉よ  
花のごと  
かがよへ







先の  
見えぬ  
道がいい

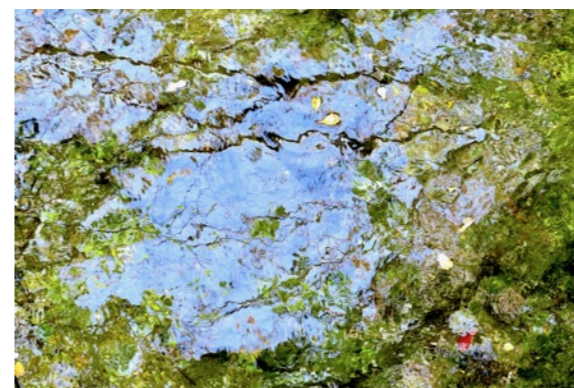
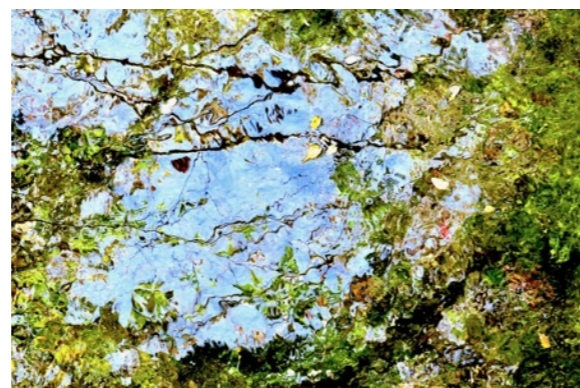
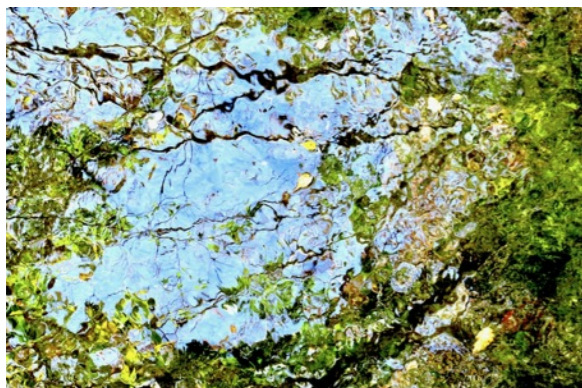
行方を  
定めぬ  
旅がいい

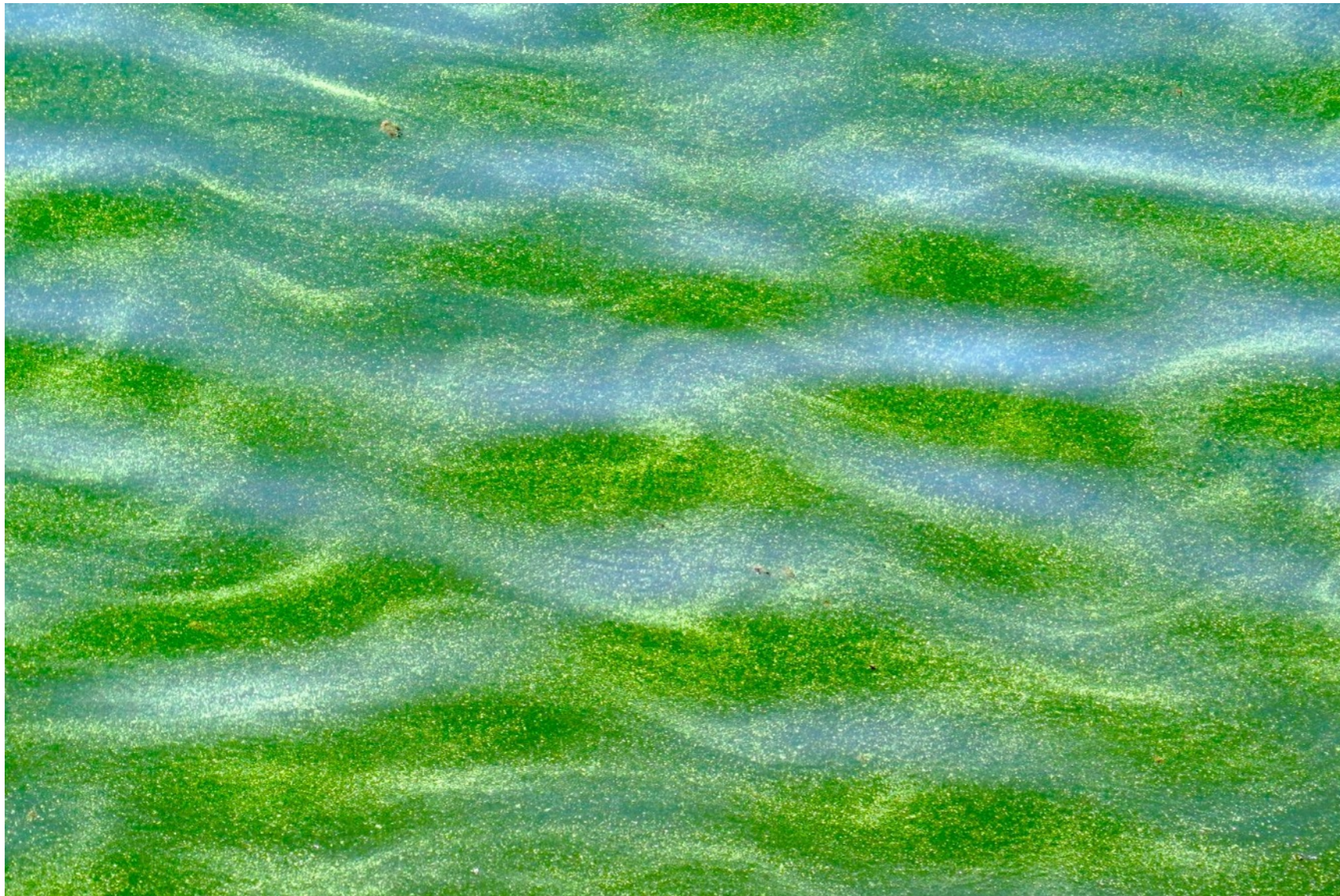
決められた  
絵のなかで  
決められた  
絵を描かぬために

手の  
なかは  
空がいい

心の  
包みは  
空がいい

すでに充ちて  
あらたになにも  
注げないでいる  
器にならぬために





生きていることは  
それだけで  
ふしぎ

(どうして)  
(生きているんだろう)

ふしぎならば  
ふしぎを  
遊んで生きる

(生きていることが)  
(悦びになりますように)

ふしぎのなかを  
ふしぎのわたしが  
戯れてゆく

